
『メインディッシュは二人で』

ソラゴエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『メインディッシュは二人で』

【Nコード】

N2463X

【作者名】

ソラゴエ

【あらすじ】

西暦2056年　そこは人工的に創られたパラレルワールドに住む選択肢が当たり前と掲げられた世界だった。

開発仮定

地球温暖化や大気汚染により、異常気象が多々観測されるようになった。

その影響の一つ、大気汚染によって生成された大型スコールは、雨粒をまるで釘のように扱い、それを人々の体や傘に酷く強く打ち付けた。

もつと事細かに説明すれば、雨粒は有毒ガスを含んだ高濃度の酸を含んだ酸性雨であった。それも、人の皮膚すら溶かすほどの威力。堪らなく皮膚を溶かされた人々は、ムカデのように道端でのたうち回りやがて動かなくなっていく。

巨大なスコールの過ぎた後には、腐った屍が道を敷く。辺り一面腐臭が漂い、眉根を寄せるもの、嗅覚が麻痺し感じないものなど個々の表情が窺える。

が、日常茶飯事となってしまうたその光景に、もはや誰もスコールによって死んだ人を確認しようとはしなかった。

人々は皆、死体には見向きもせず、酸性雨によって溶けた建物を復旧する作業に入っていくのだ。

復旧しては溶かされ、また復旧しては溶かされのいたちごっこの日々が続く、そろそろ限界だと発狂する人が増え始めた頃だった。

例え未来がどうなってもいい。今を生きたいと思わせる機械が発表されたのは。

数十年後、日々微々たる変化が続く首都の街並みの中、人々は溶

ける建物の下、降りしきる酸性雨に脅えることのない生活を送っていた。

一人の精悍な顔つきの男　だが服はボロボロである　が赤ん坊の掌ほどの小さなキューブ型の端末を取り出した。

雨具などを出さずに、である。

そしてその小さなキューブを握り、投げたかと思えば前へ一歩踏み出し、そして消えた。

2056年、そこは人工的に創られたパラレルワールドに住むことが当たり前だとされた世界だった。

地球上の酸性雨に耐えかねた科学者は長すぎる年月をかけ、反物質を使い、新たな素材を作り上げたのだ。

もう少し完成が遅ければ生態系は全て破壊され、地球は何も無い惑星となっていたらうと言われているほど、タイミングが良かった。

生物の全てが絶滅危惧種とされ、六十九億人も居た人間でさえも千二百一人と驚異的な数に減り、とっくに絶滅危惧種となっていた。

スコールの激しい日に出る死人の平均は約三百人。

飢餓によって少なくとも、一日に三十人は死に至る。

酸性雨によって、食する植物も生物も溶けてしまうのだ。

五日も遅ければ、人間は滅びるところであった。

五日で滅びる危機に救世主が如く現れた新素材に人々は疑うことを忘れ、飛び付いた。

それは、エネルギー密度の高い反物質を使い、人工的にパラレルワールドを作り出すという物だった。

反物質による新素材の向こうにあるものは、酸性雨の降らない地球と言ったところか。

新素材は、スコールに脅えていた人々を解放したのだった。

だが、そんな便利なものにはやはり副作用がある。

新素材のパラレルワールドに居た時間だけ、寿命が縮むと言われているのだ。

パラレルワールドに居た時間、一分つき一日寿命が削られる。

原因は分かっていないとの公式発表だが、この副作用が足を引っ張り、人類はまた悩まされている。

だが、寿命が減りはするがスコールの脅威は和らいだため、人口は急激に増えた。絶滅は免れたのである。

と、まあこれらが学生に教えられるテンプレ的現代世界の内容だ。

今では教育を受けさせることが出来るほど、世界は安定してきた。教育内容は生きるためにはどう行動するかという非常にシンプルかつ動物的なものになっている。

故に、いくら現代世界を学ばせたところで理解できている生徒はたかが知れていた。

また、学生が授業を受ける部屋はもちろん、パラレルワールドの中にある。

一分につき、一日寿命が減ると言うことで、授業内容は最低限。そのため、野性的な事柄しか教えることが出来ないのである。

これについて、子供の寿命を減らすな、だが授業は受けさせるなどあんまりな意見を言う親が関係していると言われている。

昔で云う教育委員会には、親の意見の他に、支離滅裂な文を展開、思考力の薄い若者が増えて困っている、などの要望または苦情が入ってくる事が多く。板挟みのこの状況に、頭を悩ませているようだ。

「動物的な、本能的な、そんなんは人間じゃないんでねえかの……」
開かれた文書の文字をなぞり、昔問われていたことを口に出して
言ってみる。

今の時代、生きること必死な奴が多くて人間がどうだの考える輩は少ない。

俺的には、もっと理論的なことを学びたかったがの。

つり上がったグレーの瞳に、中性的でまあまあ整った顔。短い髪は寝癖によってさまざまな方向に藍色を飛び散らせている。薄い生地ですく作られたコートは所々溶けていて、酸性雨の被害を受けたと見られる。

その男、倉井は人の半数を敵に回すようなことを考えた。いつの時代も、勉学を好むものは少数だ。

倉井が現在居るこの場所も、それを理由に人が立ち入ることは稀だ。倉井の周囲には文書が無造作に積み重ねられており、ぐらぐらりと揺れている。今にも倒れそうであることを倉井は気づいていない。

国家指定図書館、見聞室。

今や英雄と呼ばれ、崇め讃えられている科学者が酸性雨から逃れ、土の中、湿気と対峙しながらも必死に守ったと言われている文書が保管された膨大な図書館。

その一室。文字どおり、文書を見聞きできる部屋に倉井は椅子に腰掛け、勉学に励むと同時に文書を探していた。

埃の息のつまるような臭いが鼻を掠める。この臭いは、嫌いじゃない。外に蔓延る腐臭よりはよっぽどマシであるし、何よりこの匂いは本を連想させてくれる。

埃臭さで落ち着くなど言ったとき、同級生からバカにされたことがあったか。

「いや、今はそんなこと関係ねえだろうが。それに、開いてる本は今必要ない。仕舞わねがの」

誰も居ない見聞室。自分に言い聞かせるだけに開いた口。また一冊、文書を積み重ねぐらぐらりと揺れた。

刹那、倉井の眼に映ったのはスローモーション。数十冊の積み上げられた文書が自分に降りかかってくる映像。これだけスローモーションで見えるのならば、避けられるのではなどと考え、打ち消し。

読み終えた文書に再び眼を通すこととなった。

「……早く持ってかねえと、園崎に怒られんだがの。やっちゃったが」

やれやれと言うように困り果てた声を出しながらも、表情とは釣り合わず。

眉を下げながらも、散らばった文書を眺める眼は優しく、唇は嬉しそうに弧を引いて、薄く笑っているように見えた。

少しの時間でも多く、この空間に居ることができる。いくら園崎に罵られる未来が見えたとしても、唯一リラックス出来る場所に居られる、それは嬉しいことだった。

「遅い！」

研究室と書かれた薄汚い白い扉を開くと、直ぐ様、頭に響く甲高い声が倉井の耳を通りすぎた。

いつものしつとりとした口調はどこへ行ったのやら。

なかなか資料を持って帰らない倉井に業を煮やしたのだろう、彼女にしては珍しく声も大きかった。

「……遅くなつてすまんと思つてんよ、園崎。なかなか見つからんくての、手間取つてた」

そんな彼女　園崎の様子に若干驚きながら、宥めるように倉井は言った。

すると園崎は荒かった声をいつも通りに直し、落ち着き払った口調で捲し立て始める。

「嘘。だつて倉井は図書全て記憶してるじゃない。図書全て記憶してるってことは、倉井、君の脳内は小さな図書館ってこと。だからえーと、……そう！　いちいち見聞室に行かなくなつていいのに。君って人は本当が好きね。だから皆から異質の眼を注がれるのよ」

「園崎、話がズレてる。それに、本は本であるから、価値があるんですよ。本が失われるとどうなるかって、文書にかかれてたろ。それに、人の脳内には限りがあるから……俺にだつて」

無限に覚えられる訳じゃねえで。有限だ。

ため息を吐き出すように言い放ち、入口で立ち止まっていた倉井は、持ってきた本を担ぎ直した。よたよたと不安定な足取りのままに、部屋の奥へ進み出す。

「あつ、ちよつと待つて。そんなに分厚い文書、持ちきれないだろうから持つよ」

「……いい、気持ちだけ受け取っとく」

今だ入口に突っ立っている園崎の気持ちを断り、倉井は薄暗い研究室を危なっかしく進む。

研究室は、一種の廊下や通路だと言っているほど入り口から最奥までの距離が長く、細長い部屋の作りとなっている。

それに、正直、本は重たい。華奢で、さらにもやしっこの倉井には立つのが精一杯の重さであり、やっと担いでいる状態だ。

だから、持ってもらった方が良いのだとわかってはいるのだが

「ほら、ふらふらしてる。倉井ってば」

「おろ？」

小走りする足音が聞こえたと思うと、視界に長い深緑色が入り次の瞬間には担いでいた本の半分が園崎の手に渡っていた。

「力仕事は私に任せてって、何度も言ってるよね？」

「……じゃあ、見聞室まで取りに来てくれてたら良かったで」

来なかった理由は分かっているが、見聞室から研究室までの距離は長い。

薄暗い中、研究室の奥まで行くのはなかなか面倒なため園崎の行動はありがたいと思う。でもいっそ見聞室まで来てくれたら

と不満が口に出てしまう。

「だって、黒須から離れたくなかったし」

ほら、やっぱり黒須だ。

「ほんと、園崎は黒須が好きだの。文書持ってるのだって、黒須に褒められたいが為じゃろ？」

園崎の頬が、みるみるうちに紅潮していく。それは、恋する乙女などの愛らしい表情ではなく。

「だって！ 黒須は私の全てだから」

恍惚とした、黒須を妄信してやまない彼女の本性であった。

「黒須はね、凄いだ。私のやれないことを平気でやってのけるの。不器用でがさつで無粋な私と違って」

「いつも聞いているからもう言わなくていいが。ほら、前に向き直った方がええんでね？ 本とか、危なそうに見えるんよ」

黒須の話をするときの園崎はどうにも落ち着きがない。

今だって、本を抱えながら深緑色のロングヘアは倉井より少し前に行ったかと思うと振り向き、語りだした。後方注意である。

倉井に水をさされ、園崎はしぶしぶ、くるりと前へ向き直した。

狭くはないが、何せ薄暗い。体勢を崩して転んでもしたら大変だ。

園崎の怪我もそうだが、持ってきた文書が古い。扱いが雑だとすぐに破れてしまう。

文書は貴重であるし、何より、彼女の妄信する黒須が持ってこいと命じたものなのだ。

園崎としては、大切に扱わねば黒須に怒られるという最悪のイベントに突入してしまう。

それに、

なんか、胃の辺りが気持ち悪い。どうしたんかの、俺。

黒須の話聞いてるとたまに、なんとも言い難く、締め付けられるような息苦しい錯覚に襲われる。

原因は不明だが、すぐ収まるし、たまにある程度なので倉井はあまり気にすることはなかった。

「倉井？」

黙り込み、本を抱えていない左手で胸を押さえている倉井の異変を感じ取ったのか、園崎は心配そうに話しかけた。

「……ん？ 大丈夫だで。ただ考え事してただけだの」

「そう？ ならいいけど。最近原因がわからない疫病で死ぬ人が増えてるみたいだから、それだったら嫌だな、なんて。宗教とか信仰の類の話っぽく、魂が抜け落ちたみたいにげっそりした姿の死体が見つかるんだって。怖いねえ。これ以上、死んで欲しくないのにね」

「そっだの……」

謎の疫病について語っていると、長く続いた通路のような部屋の壁が、やっと見えてきた。

「あっ！」

壁が見えると同時に、薄暗かった部屋に光が溢れ始める。椅子に腰掛け作業するシルエットを短い間隔で点滅し映し出す光は、眼球を酷く刺激する。

この感覚が嫌いで仕方ないと倉井は目を細めた。

そんな心情の倉井とは裏腹に、園崎は持ってきた文書を放り投げ出す勢いで、点滅するシルエットに駆け寄った。

「黒須！」

それは子供が親と再開した時の喜びようにも見えた。「ああ、二人ともおかえり。お疲れ様、大変だったろう。ありがとな」

黒く太い縁の眼鏡をかけ柔らかな笑みを浮かべながら、飛び付く園崎を受け止めた一人目のシルエットは園崎の行動源、黒須である。

「……………」

しかし優しく受け止められた園崎の表情は黒須と違い、浮かばない。先ほどの笑顔とは違ってかわって、仏頂面だ。

「園崎？」

どうしたと言っかわりに、黒須が園崎の名を呼べば、

「名前、呼んでほしいな」

ああ、また始まったで。

園黒名物、ばかっぶる。この時代ではあまり使用されることは無くなった単語が倉井の頭の隅に浮かんで消えた。

「ああ。……おかえり園崎。運んでくれてありがとうな、嬉しいよ」
「うんっ」

えへへ、とにやけながら園崎は黒須に絡み付く。つまりは、倉井と纏められたのが嫌だったのだ。ちゃんと名前を呼んで迎えてほしいかった、と。全くこの二人はいつもこうだ。こっぱずかしい。

そんな胸焼けのするようなやり取りを苦笑混じりに眺めていると、肩を叩かれた。

「つかれ。ほら、新作だぜ」

いや叩かれたと言うよりは、肩に頭突きをされたと表現したほうが的確か。

「ありがとな、いつも」

倉井は目線を少し下にずらし、差し出された所々溶けた銅製の力

ツプを受け取った。

「いいぜ、んなの。たまたま良く育ったんだ。飲んでくれ」

にかり、そんな効果音がつきそうな爽やかな笑みの青年の背は、低かった。

男性平均身長百七十五センチを大きく下回る百五十八センチの青年、松蔭。

「はー、しかしああ言うのは俺らの居ないところでやってほしいもんだ」

そうなの、と相づちを打つとそうだろうと何故か力強く頷いた松蔭を尻目に、倉井は思う。

昔の小説に書いてあった、合法なんとかって言うのはこれかの。

まあ、こんな考えを聞かれれば、しばらくはパラレルボックス産ハーブを使用したお茶が飲めなくなるから言わない方が良さだろう、とも思った。

「なあ……。なんか、音しねえ？」

爽やかだった表情はしまわれ、神妙な面持ちへと変わった松蔭が天井を見上げて呟いた。

「別に、スコールでねえの？」

「来たとしてもここは黒須の作った研究室だから大丈夫でしょ？」

松蔭が気にしているのは、建物を打ち付ける酸性雨の音がいつもと違うことについてだった。

反響した音が耳に残る、異常な音。

けれど、松蔭以外のこの場に居る者は不思議とは思わなかった。

心配することではない。何故ならば、ここは国家指定の文書の眠る場所だ。

頑丈に作られているし、今も尚、復旧作業に手を抜かれることのない数少ない建物だ。酸性雨にだって、耐えてこられた。

現代の精一杯の最新設備の整ったこの研究室がまさか酸性雨に一本とられるなんて、思うわけがなかった。 ついに一滴、落涙す。黒須の足元で弾けた酸の強い涙は、それまでの楽観を覆い隠すほど強烈なインパクトをもたらした。

その滴を筆頭に天井から一滴、また一滴と酸性雨が垂れ始める。これが意味するは盾の破壊。

「おい、そんな……」

「ついにここまで影響が来たってのかよ。ふざけんなよ……」

「文書とpbが溶かされる前に移動しなきゃ！ 黒須！」

滴る酸性雨に呆然とすれば絶望もする。早くパラレルボックスへ

と避難し、文書や研究の産物を守らなければと漠然と思い指示を促す。

黒須に至っては、突破されたなど思いたくもなかった。けれど、地球はどうやら想像していたよりも早く、容易く牙を向いた。また一滴、灰色の滴が倉井の頭に落ちる。

目を黒く濁らせていた黒須はその滴の行く先を見届け。

「……………」

息を呑んだ。倉井のグレーの髪が一瞬、ノイズが晴れたかのように金色へと輝いたのだ。

ああ、俺は間違っていない。何も。継続中だ。研究は続行。俺は俺は俺は俺は俺は俺は俺は。世界を救える。いや、美食わせなにかさせない。絶対に。絶壁など存在しない。橋は引き続き架けられたままだ。

目に光を再び宿し、興奮覚めやらぬまま叫ぶ。

「松蔭はパラレルボックスを開け、倉井はpbを持ち園崎はそれをサポートすると共に文書を確保。行くぞ、もう一つの世界へ」

答えの代わりに赤子の掌と同じサイズの立方体が宙へ投げ出された。

開発過程

一言で表すならば、子供部屋のようだった。一昔前の、それこそパラレルボックスなしで生きていた、現代では考えのつかない時代を再現したかのような部屋だった。

散乱する玩具、勉強机の横に備え付けられた木製の棚に並べられた文書の数々、畳まれた布団が隙間より覗くことが可能な程度に開けられた襖。

天井と壁紙には点々と煌めく星が広がっているのに対し、床は訪れた者の精神を飲み込むがごとくシミひとつない白さだった。

一点を除いて。

本棚と対面した状態で右下を眺めると、うつすら四角形をした、いや、またはひし形かもしれないそれは黒くシミになって視界に映り込んできた。

酷く白いこの床に、黒いシミは主張激しく映る。しかし逆に言えば、酷く白いこの床の救世主とも言えるのだろうか。

結論を言えば、床の白さ以上に異常な箇所は見当たらない、ただの子供部屋だった。

文書に載っていた写真を拝見しただけの机上の知識で得たものを基準としていいならば。

否、ここは新パラレルボックス 仮名、pbによって創られた

一つの世界だ。

故に、意味など然程ないのだろう。

壁紙のミスマッチさが際立つところに、倉井は来る度頭がぐらぐらと沸き立つような、貧血と同種の症状に襲われた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2463x/>

『メインディッシュは二人で』

2011年11月26日01時50分発行